

最新式のピカピカの山の道具がゴマンと店頭に並び、どれを選んでよいか苦勞する時代になったことは誠に結構なことである一方、「山道具も使い捨て」という風潮も出来て、毎年毎年ニューモデルなるものが発売され、「旧モデル大バーゲン」などという登山用具店やメーカーの餌食になるという有り難くない世の中にもなってきた。

当会にも若い会員が多数入会された。昔はどのような山道具を使っていたのかを若い方々に頂き、また古い方々には「昔、そんな道具も使っていたナア～」と懐かしく思い出していただければ幸甚である。

懐古趣味は老人の悪弊の最たるものであるが、山岳博物館の片隅に追いやられて燻ぶっているジオラマ爺さんの繰り言として読み飛ばして下さい。コラム形式で数回連載の予定ですが、まずは第1回、ピッケルとアイゼンをどうぞ。

昔のピッケルは、杖替わり、バランス保持、ステップカッティング、滑落停止などがその主な機能であった。従って、シャフトは真っ直ぐで長尺物、材質は木造であった。

今のピッケルは、むしろ積極的な登攀支点としての機能が重視され、シャフトは短く、しかもベントシャフトになっている。更にはアイスクライミング用に至っては“カマキリの手”になっていてとてもピッケルとは思えないシロモノである（写真④）。

さて、右の写真①は私が50年程前に使っていたピッケルである。シャフトはタモの木で出来ており、木質保護のために常に亜麻仁油を塗って磨いていたので、今では黒光りがしている。シュピツェは②のようになっていて、今のようにピッケルを雪中に打ち込んでアンカーにするようにはできていない。

これは“札幌門田”の製品で、③の銘がヘッドの部分に刻印されている。BERGHEILとは“山よ万歳”、K. I. W.とは門田鉄工所(Kadota Iron Works)の略である。シャフトの長さは85cmあり、現今のピッケルが長くても65cm程度、カマキリの手に至っては50cmしかないのに比べると、まるで杖の長さである。

当時の日本製のピッケルは、本場スイスのシェンク、ベント、ウィリッシュなどを手本にして造られた仙台の山内作か札幌の門田作くらいしかなかった。舶来のピッケルのヘッドは薄身の美しい流線型で、惚れ惚れするような逸品であったが、目の玉が飛び出るほど高価で貧乏学生にはハナから縁が無かった。

門田からも、「低温に強く、カラビナが通せる穴開きピッケル」というキャッチフレーズで、ニッケル・



クロームモリブデン特殊鋼で作った優雅な曲線の薄身ヘッドと大きく開いた銀杏型のブレードが美しいピッケルが発売されたが、これも舶来品ほどではないにしろ非常に高価であったから、とても手が出るシロモノではなかった（写真⑤）。

私が買った前頁の物は並みの炭素鋼製の鍛造品であって、すぐに錆が出るので、ちょっと放置しておくとならまち“赤錆”になるからサンドペーパーでしょちゅう磨いて油を塗っておかなければならなかった。

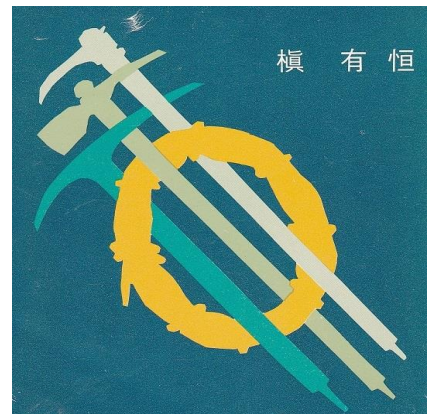
この炭素鋼製でも結構なお値段で、当時の大学の半年分の授業料とたまたま同額であった（4,500円）。学食の支那ソバが確か15円だったと記憶しているので、今の金額に直せば現今

のピッケルの数倍の値段だったことになる。私事で恐縮であるが、田舎の親から仕送りされてきた授業料がこのピッケルに化けてしまって、大学の会計係から授業料未納の督促状が親元に配達され、このことが親にバレて大目玉を喰らったことがあった。当時は、学生が授業料を滞納すると督促状が親元に行く仕組みになっていた。

余談を重ねて恐縮であるが、ピッケルはかつては「氷斧」と言われた。スイスアルプスなどで、羚羊などを追って氷結した岩場などを歩く猟師が氷を打ち砕いて歩き易くするために作られたツルハシの他端が斧になっているツルハシであった。氷を掻き削る唐鍬のようなものもあったらしい。これらが原型になって登山用具としてのピッケルが誕生した。右の図は日本の黎明期のアルピニスト達がスイスから持ち帰った原型ピッケルの挿絵である。現今のピッケルとは随分形が異なっているが、往時はこのようなものを使っていたのである（上＝旺文社文庫版・榎有恒「山行」のカバーより引用。上側の2本の形状に注目されたい。下写真＝ブレードのみのもの）。

日本にピッケルを持ち込んで仙台の山内や札幌の門田に模造させ、彼らをピッケルの名工匠に育てたのは、アイガー東山稜初登攀で世界的に名を馳せた榎有恒である。榎が持ち帰ったのはスイス・グリンデルワルトの名匠シェンク作のピッケルであった。当時のシェンクはスイスを代表するピッケル鍛冶であったが、2代目は家業に力が入らないならず者であったそうで、グリンデルワルト産のピッケルは同じ村の鍛冶屋のベント作に置き替わっていった。ベントのピッケルは、ヒラリーとテンジンがエベレストに初登した時にも使ったし、その後ヒマラヤ登山隊のスタンダードにもなった。スイスのピッケル鍛冶屋については、榎有恒の他、「たった一人の山」の浦松佐美太郎や「アルプス記」などの松方三郎の著書に詳しく書かれていて興味深い。

たまたま先般グリンデルワルトに行った際、鍛冶屋ベントは今はどのようなになっているのだろうかかと尋ねてみた。ピッケルなどを置いている街の登山用具店で聞いてみたが、大概是“ベント”や“シェンク”の名前さえ知らず、置いてある物もペツルやブラックダイヤモンドばかりであった。それもその筈であろう。今時ウッドシャフトのピッケルを求める様な酔狂はいない。





ベントの鍛冶屋を探し当てると、そこは今は鉄工所になっていて、4代目の親爺が建築用のアングルなどを溶接していた。今はピッケルの方は、注文に応じて年間何本かは作るらしいが、納期は1年間ほど掛かるということだった。

ベントを扱っている登山用具店によれば、年間1～2本しか入荷が無いので、今注文を受けてもお渡しできるのは来年の夏だから、来夏またグリンデルワルトに来られたしとのことであった。お値段は1000スイスフラン(約10万円)以上、天井知らずとのことらしい。

右上の写真がグリンデルワルトの今のベントの鉄工所である。工場にはピッケルの「ピ」の字も見当たらなかったが、それでも軒先の文字に“Eispickel-Schmiede”（ピッケル鍛冶屋）と書かれているのが泣かせるのではないか。その右には見づらいが“BHENT”の文字があった。

さて、次にアイゼンに移ろう。右写真⑥は、50年前に私が使っていたもので、ピッケルと同じく札幌門田製である。さすが道産子、武骨一点張りの頑丈なものだったが、それだけに重かった。8本爪で、足裏前部と後部に関節はあるが、長さや幅は全く調節が効かないシロモノ。長さの方とはもかく、幅の方はかなりユルユル・ガタガタであったので、リングの支柱に割り箸を縛り付けて靴幅に合うように横幅を調節したものだ。当時の山靴はソールが今ほど硬くなかったため足裏が曲がったからアイゼンも前後に曲がるようになっていた。アイゼンバンドは一本締めだった。

このアイゼンも炭素鋼の鍛造品であった。ある時岳友の誰かの家に遊びに行ったまま戻って来なかったため、次に谷製たにのアイゼンを買った(⑦)。こちらは爪の数が2本増えて10本爪であったが、今のような前爪は付いていなかった。道産子よりもスリムになっていた。また、今では常識のアンチスノープレートは付いていなかったため、雪団子に苦労させられたものだった。

当時のアイゼンはピッケルと同様に、今のようなプレス製品ではなく鍛冶屋が一足一足金床で叩き出した鍛造品であった。ピッケルはまだしも、形状が複雑なアイゼンは鍛造が難しかったそうだ。しかし、ピッケルにしてもアイゼンにしても、鍛冶屋が金床から叩き出した鍛造品には一本一本に微妙な形の違いがあったりして、得も言われぬ味があったものであった。

次回はザイルの予定。

